

ダンテ神曲解説序説

石倉小三郎

第1章 ダンテとその時代、ダンテ小伝

1921年9月21日はダンテ・アリギエリが追放者として「他人のパンの如何に辛きか、他家の階の如何に険しきか」を永の年月に亘って味わった末、故郷フィレンツェから遠く離れたウヴェンナの地に多難な深刻な生涯を終えてから、まさに600年を経たその日であった。それでその年には、伊太利は勿論欧州各地に於てダンテ記念の講演が行われダンテ讃仰の念が一際著しく燃え立ったのであった。私はその年の暮に独逸へ着いて、更に伊太利へ行ったのはその一年後であったから、それ等の事は既に終っていたのであったが独逸の書店の店頭でダンテ研究書が格別に多く並べられていた様に覚えている。そして大戦後の影響として知識人の間に中世渴仰熱が盛んになっていたことは著しい事実として認められたのであった。伊太利人はダンテを彼等の国民的統一の予言者として見、母国語の尊さの発見者として尊崇した。母国語をば当時の学者語より勝れたものとして、彼の主要作神曲に於て未到の高さにまで高めた事は、世界の国民文学史上に類例なき事実である。その頃は伊太利、独逸は第一次世界戦争に於ける創夷の格別著しく現われていた時であって、民衆は、虚無と懐疑との間を彷徨し思想的漂浪の明け暮れを重ねていたのであったが、そこにダンテやゲーテを宗師と仰いで国民的復活を憧れ望んでいた彼等は、その後数年にしてファッション的統一に突入してしまった。ダンテが理想として翹望したところの神の意志の実現、帝法両権の提携合致による宇宙政治統一など云うことは、現代に於て考えらるべきことではあるまいが、40年間に二度までも戦争に突入してはその惨禍を体験し、そしてダンテの理想の如きはその一片すら夢想だに出来ない様な状態に陥ってしまったのである。その事は運命の皮肉などという言葉で片づけらるべきものであるか如何かは知らないが、それはともかく、現時の情勢下に於て、中世渴仰者がまた殖えているのではあるまいかなどと私は今再び考えさせられているのである。

『まっすぐな、または曲った多くの途を通して吾等の現代は、中世の精神的源泉に向って迫り進んでいる。過渡期の分裂状態の真中で無数の力が、自分を妨げる力などには目もくれないで盛んに活躍しているとき、そして宗教や国家や学問や、人生に於ての事実上現存している多くの姿が、その内的是認に関して、またその歴史的発展に関して無遠慮に批判されているとき、それ等の多くは目標も知らずに徒に努力のみしているその時代の真只中に、中世の世界観に対

ダンテ神曲解説序説

する、そしてその代表者たるダンテに対する異常なる興味が燃え上っている。』これはその頃出たツォスマンの神曲訳の序論としてコンスタンティン・ザウテルが寄せたものの冒頭の言葉であるが、私にはこれが現代日本の情勢下に於て、これ等の身にひきくらべて如何にもと肯かれるのである。ダンテの時代は所謂中世の暗黒時代で僧侶や帝王の横暴な専制政治の下に、一般人民は悲惨な生活をしていたのであろうが、それはただ陰鬱な泰平を楽しんでいたわが徳川時代とはちがうものであったのではあるまいか。そしてその中にダンテの叱咤の一大獅子吼が、彼が熱愛する祖国を慢性的内乱状態に陥れたところの門閥間の争闘に向って、また法王と皇帝とが各その至大至高の義務職責を忽諾にしているのに対して、雷鳴の如くなげつけられているのを読む時、われ等と雖も真に冷汗三斗の思いがあるのである。市民が追放の苦難を浴びつつあるダンテの道行く姿を見て、「あそこに地獄へ行って来た人が行く」と恐らく驚嘆と畏敬の表現であろうところの言葉を発するとき、そこに彼等はある種の満足と誇りとを感じていたのではあるまいか。彼等は圧迫の下に徒に蠢動していた賤民ではなくて、萍水相逢の間にも美しい夢を見ていた者の様に思われるのである。私はこの意味で中世紀の人々の心境を羨望している。それがいま私をして神曲解説という至難な業に向って筆をとらせたのである。「カートリアの山の下の修道院で、橄欖の液の食物のみにて、軽く暑さ寒さを過す」生活を憧憬した些かはそれを実行しつつ、地上の巡礼の終るのを待ちたいと思う私の心持は、頽齡期に達した一老学究の弱さの愚痴のみから来たのではないことを、お断りしておきたいのである。

ダンテの生涯は外面より見れば、古来の詩人の中にも類例なき程の悲劇である。彼は一切のものを奪われた。青年時代の野心は打ち挫かれた。希望は凡て消滅した。多望なりし一生は流竄に於て終結した。しかも境遇の悲劇のうらに靈魂の戯曲があった。生活の戯曲は漂零の生活の悲劇に終ったが、靈魂の戯曲は神聖喜曲に完結した。

神曲がもつ偉大なる魅力は主として彼の個性から出発する。ダンテその人の深刻なる内面生活と崇高なる理想と熾烈なる熱情とがその中に鑄込まれていることに存するのである。詩人自身が主役として三界遍歴の詳細に記述したこの詩は、結構より云えば、地の奥底より天の窮極まで、即ち全宇宙が包括されている。具体的に云えば、聖書とアリストテレスの哲学と、ヴィルギリウスの詩と、トマス・アクィナスの神学とその他当時の学術智識一切が包蔵されている。神曲は人間情熱の客観的見解であると共に伊太利と世界との歴史であり教会と国家との関係についての政治哲学であり、流竄の自叙伝である。また基督者としての、そして自己の過誤を自覚し、己れを救う神の恩寵を知れる者としての懺悔録でもある。神曲のうちに彼はただに他の人々の罪惡を示すのみでなく、自己の罪惡をも示しこれを責めている。若しそれがそうでなく、単に学問智識の集積に止まるならば彼その人も、その作品も、時代の塵の中に埋められて、僅かに学者の好奇の研究の対象としてのみ生きていたであろう。ダンテは極めて印象のはっきりした個性である、その輪廓は時に際涯なき英雄的なものへ消え失せることもあるが。ダンテが近代人をひきつけ親しく語りかけるところの魅力はまたまさにそこにあるのである。個性への

努力、自ら戦いとり自ら確信する精神的所有への逼迫、確実な安静な場処への郷愁を感じながら、あらゆる途をふんでの彷徨、人間の尊威に於ての昇りと降り、没落と復起、これ等は現代の努力の人間の特性をなすものであるが、ダンテはまさにかくの如き人であった。しかしこの詩の中でダンテは自分について語ってはいない。ダンテの生涯はホーマーほどに神話的ではないが、沙翁のそれと同じく語らるべき材料は甚だしい。

ダンテ・アリギェリは1265年に上部伊太利の水清き花の都フィレンツェに生れた。ダンテとはデュランテ Durante 堪へ忍ぶ人という意味の言葉の短くなったものであるからそれはこの詩人には甚だふさわしい名であるとも云い得るであろう。ダンテという姓の由来はボッカチオによれば次の如くである。彼の家はもと羅馬の名家フランギバニより出たのであったが彼のフィレンツェに移住して子孫は富み栄え、一族にはカッチャグィダなる人がありその人は武と智と勇とにすぐれていた。彼は青年の時アリギェリ家の女を娶り数人の子を挙げ、そして当時の習としてそのうちの一男子に母の家名即ちアリギェリを相続させたのであった。カッチャグィダについては、ダンテは神曲の中に誇りげに述べている(天堂界第十五歌参照)。彼は皇帝コンラッドに従い騎士の列に加えられたとなっているから、1147年第二十字軍の際皇帝コンラッド三世の配下に属していたのであろう。祖先についてはこれ以上詳にしていない。カボッチョの云う如く羅馬の貴族であったか如何かも不明である。

父は公証人を業としていたと伝えられている。生母に早く別れ、ベルラと云う継母に育てられ、幾何ならずして父も死んだ。父は政治的にはゲルフに属していたが、この党の追放の時も免れているから、あまり大きな存在ではなかったのであろう。ボッカチオの云う如く「親達は名なく子によって有名になった」のであった。

幼にして両親に別れたダンテは、継母の膝下にあつて文学の師に就き、七学 *liberali Arti* を修め、真に秀抜なる天賦の能を発揮した。親戚及び当代第一の偉人ブルネット・ラティニに勧められて、文学はもとより高等の学芸を専心に研究し、有為の人物となるために必要なものは一として学ばずということとはなかった(ブルニ)。ここに云う七学とは所謂三学 *Trivium* 四科 *Quadrivium* は文法、弁証学及修辞、後者は算数、幾何学、音楽及び天文で今日から見れば学問としては甚だ幼稚であった。それらを修めてから物理学、論理学、神学を研究するのが中世期の教程であるが、普通学を終ったダンテは刻苦勉励して別に大学にも入らず、あの驚くべき学問智識を得たのである。即ち彼自ら『饗応篇』に云う如く『天使のつく食卓よりこぼれ落ちるパンを拾い集めた』のであった。彼の師と称せられるラティニに対しては、彼は彼を猷慾の罪人の中に配しながらも深甚な感謝を表わしている。(地獄界第十五歌参照)。ラティニに関しても果して贅を執つてその門に出入したものか如何かは明かでない。ラティニのダンテに及ぼしたる影響は寧ろ政治思想上の方面に於てより強く、学芸の上には縁が浅かったとも云われている。しかし彼の大著「宝庫」とボエティウスの「哲学の慰安」はダンテの教養にとって大きな役割を演じている。要するにダンテの学殖は少壮時に於て正規の課程によって蓄えられたものではなく、寧ろ追放の身となって諸侯のもとに客として不自由な日常を送っていた間に修めた

ものである。「饗応篇」劈頭の文に自らを学者の列に加えていないのは、敢て身を卑うせる謙遜の語のみではないであろう。

ダンテが生れた時代のフィレンツェは騒乱混雑の極に達していたのであった。一体芸術活動の隆昌は、武力に政治に国民が全力を緊張させきっている時代に当るということは、世界歴史の大なる秘密の一つである。トスカーナの共和制諸都市—フィレンツェ、シエナ、ピザ其他がまさに血で血を洗う様な激烈な戦に寧日なく、その市民は各自の独立都市の内部で深刻な党争に煽り立てられている間に、その時代の不利に拘らずこの高い理想詩が出来たのである。象徴的には光栄ある羅馬帝国がなお存続していると考えられる一面、実際には統一的な国家観念は発達して居らず、当時の人にとっては、自分が生長し又永久の休息所とした市が国家であった。ダンテにとってもそれはちがってはいなかった。市の門を出ると異邦であり、次の町に行けば風習を異にし、少し離れては言葉さえ充分に通じない有様で、しかもそれ等が常に凄惨な戦事としていたのであった。ことに十三、四世紀は、その最も激しかった時代であった。彼の故郷フィレンツェに於ては貴族の勢力は全く衰えて瀕死の状態にあったが、これに代って出た民主政治は、これまた奸策に富む政治応酬に終始している有様であったので、その間に特別な少数政治が出来上り、この小さな市内に惨酷な党争を煽り立てていたのであった。熱情的な剛頑な市民はこの烈しい争の旋風の中に、銀行業や染物業やその他の実業に敏活な手腕を揮い、商業的には他市を圧するの概があった。この短い時期の圧縮の産物とは思えない様な多くの芸術作品が、魂の昂揚と、大なるもの貴いものへの絶対帰依を示してそこに立った。古都フィレンツェに吾等がいま讃仰するものの多くが、この騒擾の二世紀の所産であることは、まさに驚嘆すべき事項である。勿論ダンテの時代には中世後期の、そしてルネサンスの華やかなフィレンツェはまだ見られなかった。勿論豪壮なヴェツキオ宮殿や華麗な鐘楼をもっているドームや、高い柱廊やサン・ミケーレの独特な時計や、その他のルネサンス芸術がつけ加えてくれた立派なものは、その時にはまだなかったけれども、吾等を今日喜ばせてくれる芸術品の多くはダンテの晩年期には既に始められていたのであった。

ある独逸の旅行者は記している。「ダンテ生家の附近の家も、ダンテの家比べて格別新しいとは思えない。それ等は中世式に暗く、半ば壊れて貧弱である。狭いそして光線に恵まれぬ小路は気儘な屈曲をなして、奇妙な町角を作ってはぶつかり合っている。家は突き出たり隠れたりして、その混雑した有様は、乱軍の兵隊の列の様である。建物の各種の上階は『一列に正しく並ぶ』ことを極度に嫌っているかの様に思われる。それらのあるものは町の列より半分以上もつき出て、石の柱で支えられている。全体は古代の絵画に見る様な観を呈し、その気分には於ては、ダンテが少年時代にさまよい歩き、ベアトリーチェに出遇ったであろうその時と大きなちがいはないであろう。貴族の個人の記念的な建造物は、その時代に於ては、事実上その時の市民生活の条件に適した小さな城砦であったので、そこから名家同志が、そして市民もそれに加って猛烈な戦を繰りかえし、結局名家の家族は武装せる市民によってそこから追い払われ

た。今でも市の内部にはこれ等小要塞の遺物が残っているから、ダンテ時代の有様を彷彿たらしめることが出来るのである。」

ダンテの生れる少し前に建てられたとして伝えられているポDESTA館（奉行職の官邸）即ちイル・バルジェルロも、そして豪壮なヴェッキオ宮殿も、要するに如上のタイプの大きくされた変容に過ぎないのである。このバルジェルロがフィレンツェ衰頹期に於て牢獄として又終には倉庫としてまで用いられるに至ったのであるが、ダンテの時代に彼の友なるジョットがこの礼拝堂に天堂楽園の景を描き、それにダンテの像を画いたのがあった。それが全く白壁に蔽われていたのを考古家モレニは古書に徴してこれを探ぬること2年、終に効なきを悲しんでいたのを、1840年にダンテ尊崇の心深き伊英米の3学者が心を協せて探り究め、終にこの名作を発見した。これが今日伝えられるダンテ画像のうちの最重要なものとなっている。芸術界の逸話としてもゆかしき極みであると思つて、ここにその由来を述べて置く。

この古風な小さなフィレンツェ市には、騒がしいそして流血を伴うところの党争の雑音が休む間なくなり響いていたのであった。

皇帝と法皇が大きく戦っていた大戦乱期はダンテの時代に於ては最早や過ぎ去っていた。ゲルフ（法王党）、ギベリン（皇帝党）という名も、その本当の意味はただシュタウフェン家の皇帝の時代に於てのみ持っていたのであって、ダンテの生れた時はシュタウフェン家の勢威は既に全く消滅していた。（1256—1273大空位時代）1266年マンフレッド王は戦破れてベネヴェントに墮れ、68年最後のシュタウフェン皇帝コンラードは首を刎ねられた。フリードリヒ2世とその郎党なる大きなギベリン一族、彼等は地獄界の深淵の中で大きな詩的生活を送っているのであるが、彼等に対してはゲルフ党のフィレンツェ人は軽蔑と驚嘆の混った感情を以て見送っていたのであった。

その起源を独逸に発したところのこの二つの党派者が独逸から伊太利に入り、更にフィレンツェ市民を捉えた時、彼等は教会対皇帝の争には直接関係せず、全く私怨と権力の争奪に耽っていた。それ故両党の色彩も甚だ不鮮明であるが、大体に於て、ゲルフは教会を中心とし政政治上には自由を標榜し市の中産階級を占め、ギベリンは皇帝を中心とし政治上には権威専制を求め、思想上では、前者は正統を保持し、後者は教会の権威には全く無頓着であった。ヴィラーニの年代記はフィレンツェの党争は、同市の二つの名門の間の些細なる争から始まったものだと言っている。

フィレンツェ名門ボンデルモンティ家の若い貴人が、同じく名門アミーディ家の女と婚約していた。この青年が馬を駆って市を通って行った時ドナーティ家（ゲルフ第一の名門）の一婦人が彼を呼びとめ、アミーディ家の女の不徳と醜貌を罵った。そして自分の女を彼に遇わせ、「私はこの女をこそあなたに決めておいたのです」と云った。その女の美貌は「悪魔の助け」によって彼を魅了し、彼は直ちに彼女と婚約した。捨てられた婚約の女の一家はこれを一大侮辱として大に怒り復讐を謀った。そして彼を殺すか、なぐるか何れにするかが決し兼ねていた時、

ダンテ神曲解説序説

その中の一人が「目的に達するにはまづ着手せよ」と云ったのがきっかけとなって殺戮が決定された。新郎が復活祭の朝、白い着物で白馬に跨りヴェッキオ橋にさしかかった時、軍神マルスの像の下で馬から引きずり下ろされ、彼の「血管は切り開かれた。」それが機縁となって全市は武器と騒擾の巷となった。ボンデルモンティ側はゲルフの名の下に39家、ウベルティ側はギベリンの名の下に33家が結束し、その他の市民もその何れかに組した。

名門豪族がこの様にして相争っている間に、社会改造は徐々に行われ、手工業者、商業人が政治意識に目ざめ、権力をもその手に収める様になった。かくてダンテの時代にフィレンツェの民主政治の基礎は固められたのであるが、ヴェルネル・ゾンバルトの云う如く、この民主的な小都市に資本主義的精神が初めて動き始め、近代的商工業人なる市民階層の擡頭がこの時代がありとするならば、それによってフィレンツェの政治情勢の変転は大体明瞭になるであろう。青年時代に貴族階級の血腥い私闘の終りの響をきいたダンテは、自分が実際の政治活動をなす時期に至っては、民主政治は断然たる勝利を贏ち得ていたのであった。

1288年には民主的憲法が起草実施され、権力は勤労階級の手落ちたのであったが、それはまだ民主形態に於ての富者の政治であった。その主力は組合にあったが、その組合内に於ては富商と、これと手を連ねるゲルフ、ギベリン両派の貴族達が決定的な権威であった。そこで1293年には有名なベルラの大改革に於て貴族を圧え民政を確立しようとして根本的打破が行われた。まづ公正条例を定め、これにより貴族を徹底的に力なきものとした。その中心には徒弟、助手、賃金労働者等、所謂プロレタリア民衆が立つところの21の組合に凡ての権力は移り行き、組合員はその中では全く同権である。彼等は6人の統領プリオーレを選挙し、彼等をして内閣シニョリアを組織せしめた。統領の任期は2ヶ月で、任期中は公庁に入り此中に寝食し、猥りに外出を許さず、シニョリアは云わば、「牢獄に等しいもの」であった。

貴族は直ちにこれに屈従しようとはしない。彼等は時の法皇ボニファツィウス8世と同じベルラ政府の顛覆を謀った。ベルラも自ら備うるころあったが、忠廉な彼は徒らに市民を災の中に陥れることを恐れ、潔く市を去って窃に巴里に逃れ此処に生命を終った。敵は直ちに彼に追放を宣告し財産を没収した。ヴィルラルニ年代記は彼の公正なる心を激賞し、直に「国家の幸福人民の利益を念とする廉潔愛国の士」であると云っている。彼が熱血と正義の念はわがダンテに伝わり、そしてこの人も又彼と同じ運命に殞れたのである。

貴族のクーデターは成功しなかった。実際の中堅は中産階級の人々と進歩的な人々との間にあった。この間にあってダンテが政争の渦乱に自己を投じた理由は明でないが、その政治生活が30歳の頃より始まっているのは確かである。政治に携るためには組合に属していなければならぬ。ダンテは30歳になり市の大組合の中業種商組合に入った。

1300年頃のフィレンツェは何れの方面にも活潑な気が満ち、その商業的勢力は盛んな銀行業を通じて全欧にわたって主動的活躍をなした。後のルネサンス時代の有力な家族メディチ家などもこの民主政治の地面の上に咲き出た花であった。しかし勝利を得たゲルフの中に黒党ネリ、

ダンテ神曲解説序説

ピアンキ
白党の両分裂が出来てこれがまた大なる禍をなした。これも元来はフィレンツェから起ったものではなく、それに近い市のピストイアの名門の間に起った私闘が原因となって全市が両党に分かれて争いあった。フィレンツェ政府は、両党の首領を己が政府の監督下に置き調停を試みようとした。ネリはドナーティ家に、ピアンキはチェルキ家に預けられた。この措置は成功しないで、却て禍はフィレンツェ市民にまで波及し、最初のピストイアの争の意味はなくなってしまった。

ネリの首領はコルソ・ドナーティで、名門に生れ眉目秀麗、弁舌に勝れ、心は敏捷で兇悪で傲慢で、当時の豪族なるものの標本であった。しかも彼はダンテの姻戚で無二の政敵であった。ピアンキの領袖は、ヴィエロ・ディ・チェルキで、その一族は豪商でその商社は当時の世界で第一のものとせられていたが、彼は教養なく粗暴で、まづ成り出者の好代表であった。民主派側は白党に近いわけであるが、私怨関係から貴族派から分れた若干の貴族が之に加わってもちた。ギベリンの残党や下層階級はこの派に属していた。従ってこの両党の対立は、法王党とフィレンツェ愛国党（ギベリン精神の復活）との対立を意味するものともなった。ダンテはピアンキに属する愛国者の立場をとった。彼の志向は世間的権力の独立と都市の自治をその故市に於て確立せんとする政見から出発している。そしてその事が彼を独逸皇帝党となし、反フランス・反法王的方向に深入させた。

彼の生涯に於て語るべき価値のある大なる事件は、ベアトリーチェへの恋愛と晩年の追放とである。ベアトリーチェの名はダンテの名と共に広く人口に膾炙している。彼女がダンテにとって、その終生の情熱の源泉、崇拜の標的、久遠の女性、三界の導師であったことは、苟もダンテの名を知るものゝ殆く知るところである。ダンテは自己に対する啓示をこの一女性の中に強く確に認めた。彼の一生はこの啓示がやがて展げ行く象徴である。その推移が「新生」Vita Nuovaに書き記されていることも誰しも知っている事であるが、実はそれも多くの秘密に包まれているのである。

ダンテ9才の折、花の都の春まだ古いぬ頃、ベアトリーチェと呼ぶる漸く九つになったばかりの幼女を見た。彼女は恐らくフィレンツェの名望家フォルコ・フォルティナーリの女で、後に、ある銀行家の妻となっている女であつたらう。これにも学者間に異説があつて、彼女を以て教会又は神学の象徴とする象徴論者もあり、また仮想されたる理想の女性とする理想論者もあり、またここにいう様に実際の人物と解する実在論者もあり、その中にもフォルコの女と解する通説に反して別箇のベアトリーチェを作る一派もあるのであるが、私は通説のベアトリーチェ実在論に従いフォルコの女となすものであることだけを述べておく。

『彼女はいと貴い色、つつましくもほまれありげなる真紅の色のきぬを着て、私の前に現われた。彼女は彼女の年齢にふさわしいさまに帯をしめ、それによって飾られてあつた。私は本当に告白しなければならぬが、この瞬間に私の心の奥に住む生命の魂は烈しく震え始めて、身のうちの最も弱い脈までが恐ろしくも感ぜられた。そしてわが魂は云つた…ここにわれよりも強き神はいましてわれをしるしめ給いぬ』と彼は新生の中で自ら述べている。その後9年を

ダンテ神曲解説序説

経て、彼はまた同じ季節に彼女の道ゆくに出会う。彼女は清き白衣に包まれて、年かきの女二人の間にいたがダンテを見て、そして彼は譬え様もなく優しい礼を受けた。それ以来彼は夢に彼女を思い幻に彼女を見る恋の人であった。彼の中からは豊かな抒情の歌が流れ出た。醒めて後これを一篇のソネットに作って親友の間に頒った。18歳の少年の作であるが、音調流麗、心の動きを人格化した寓言を以って憧れの情を述べたところ、正にフィレンツェ新派の体である。旧派の歌人はこれを斥けたが、ガイド・カヴァルカンティは同情深い返歌を送って、それが、これより二人の間に濃い親交が重ねられるに至る機縁を作ったのであった。

彼はその頃ある婦人を恋人の如くに装うて自分とベアトリーチェの間に置いた。そのため彼は不実な動揺した愛を持つ者として善からぬ評判を立てられ、終にはベアトリーチェの耳にも入って会釈を受けることが出来ない様になった。またある婚筵の席上、彼は思いがけずその恋人を目睫の間に見て心乱れて危く昏倒せんとしながら、僅かに身を傍なる壁の画に支える。しかしこれ程の熱情も、それがベアトリーチェから報いられるところは、只その不法法に対する嘲笑のみであった。次いで来るものは彼女の父の死とダンテ自身の重い病とである。その後彼はもう一度彼女を街頭に見る。併し間もなくベアトリーチェが永遠に地上から失われねばならぬ時が来た。1290年6月8日彼女は遂に天上の人となった。ダンテの悲しみは固より極めて深かった。彼は人しげき巷をも廢墟の如くに感じた。その悲しみの心はある美しい「優しい婦人」^{ドツナ・ジエンティール}によって慰められた事もあったが、彼は明かなる理性と意志とを以って彼女に対する恋を一貫した。そして『他の如何なる女性に対しても云われたことのない言葉を彼女について言い得る日が来るまで沈黙を守ることに決心した。』（新生の終句）。

神曲の光明と莊重とはベアトリーチェその人の象徴で、彼女は聖ルツィア、聖母マリアと同じ神座を占め、千古第一の詩人智者ヴィルギールも彼の恩恵によらないではダンテを楽土の淨福に導くことは出来なかった。ダンテが天上の秘密を覚知し法悦三昧に入ったのは、全く彼女の眼を一意に見つめた功德である。彼がかく一女性を救世主の地位にまで引上げているため、さきに挙げた様な種々な学説が出来て来るのであるが、私は彼女をば神秘に包まれたる歴史的事実と見てよいと思う。これ等の論議を紹介することは本書の目的外に出るから、ここでは省略する。實在論者の中の主なる人はスカルタツィーニであることを述べて置く。

優しい婦人の同情によっても慰められず、そこに救いを見出され得ないことを知ったとき、彼は知識思索の世界に入ってそこに平和な自分を見出そうとした。ベアトリーチェの死後から1300年ダンテがフィレンツェ市の統領となる間、^{フリオレ}即ち新生から神曲に至るまでの間には強い知的沈潜の路が、その間のつなぎとなっている。中世時代の俗人にして、ダンテほど広く深く學術的知識を持っていた者は他にはないであろう。中世では書物が少く容易に手に入らなかったが、真に知識を愛好する人は、不便を忍んで精読玩味したであろう。ダンテの如きはこの種の人であった。ホエチウス、ツィツェロを始めアリストテレスはラテン訳によって大部分を知った。プラトーンに対しても同様であった。アウグスティヌス、セネカにも親しんだ。ホメールもラテン

ダンテ神曲解説序説

訳を通じて知ったのであったが、ラテン詩人には精通していたらしく、ヴィルギールは勿論ホラティウス、ルカーヌス等によく知っていた。哲学神学に至っては、彼はその組織こそ築き上げることは出来なかったが、熱心なスコラ学徒と見るべく、基督教哲学者の作物には深く入り、神学哲学の基礎はトマス・アキヌスにこれを得、従ってアリストテレスからも材料を得ていた。

神曲を始め後年の作物には驚くべき博大なる知識が含まれているが、これ等を『新生』と比較すると、その間に大なる逕程が著しく眼につく。ツィツェロ、ポエティウスは彼が大に苦しんで読んだものだということが伝えられていて『新生』の時代には決して完全なる古典学者ではなかったらしいから、学問上の蓄積はベアトリーチェの死後、更に後年追放の身となって諸侯の邸に身を托していた間に行われたものと推測することは失当でないであろう。青年の努力が空想として斥けられるとき、慣習の力が人を自己に対して寛容ならしむるとき、中年の人生がその道義発奮力を脅かす危さ、精神的老衰が身を圧する重さは、ダンテがその全幅に於て味ったところである。後に至って彼は深き戦慄を以てこの中年時代を回顧する。この時代に対する追憶を以て彼は彼の生涯の大作神曲を始めるのである。

併し今や彼の主なる情熱は漸次政治に向って行った。政治上の野心と責任とを持って、彼は時務や党争に携はる。即ち1295年を以て実際の政治生活に入る。この頃極めて世間並な平凡な結婚をする。彼が一生の中一度もそれについて語ったことのない様な結婚である。新妻は名門ドナーティ家の出でチェンマという女性で、二人の間にはヤコーポ、ピエートロ、アントニア、及びベアトリーチェの四児があった。彼の追放中は勿論母子はフィレンツェに残ったのであるが、ダンテは一度もこの別居生活についての悲しみを述べていないのが著しい事実として伝えられているのである。

話しは少しく前に戻るが、ベアトリーチェの死の少し前、1285年5月フィレンツェ市はアレツツォ市のゲルフ党を助けて同市と戦を交え、翌年6月11日カムパルディーノの原頭に決戦をなし、フィレンツェ側が大勝を得てアレツツォを占領したことがある。この戦役にわが青年ダンテは馬に跨って勇敢に祖国の為に戦ったと伝えられている。これはブルーニの伝えるとこで、ヴィルラーニとボッカチオとは黙しているが、当時のカンツォーネの若い歌人が戦場の勇士となり、また政治家として活動するのは不思議なことでもない。

1295年12月14日に彼は『統領選挙』に就て投票し、翌年6月5日には『百人会議』でも投票している。この頃彼が市の表面に立って有力な一人物となっていた事は、1299年5月彼が小さな山の町サン・ジェミニアーノへ使臣として派遣されている事によって明かに推測される。ダンテが意見を述べたと云う室がそこのパラツォに保存されているが、それについても典拠となるべき書類が散軼しているため、これに対して疑を懐く学者もある。とにかく諸方よりの輿望を負うて組合より撰ばれ六人の統領の一人となったことは明かである。年暦は3月15日から起るもので、ダンテの存任は1300年6月15日から8月まで2ヶ月と信じられている。そしてそ

の後も政府の重要なある地位に在ったものと想像されている（スカルタッツィーニ），

併しその時既に、彼の後半生の悲惨なる運命は彼を待ち受けていた。ダンテの統領任期中、フィレンツェ市は法王庁に依頼して白・黒両党の仲裁を計った。時の法王ボンファツィウス八世は稀に見る野心家で、かねてトニカニア地方を法皇の治下に収めようと考えていたから悦んで快諾し、6月を以てオステアの僧正アツテオ・ダ・アクワスパルタを仲裁使としてフィレンツェ市に送った。始めの程は大に歓迎されたのであったが、その改革が当を得ないのと、市の自由を奪わんとする法王の野心を気づき出した市民は、マツテオの忠告を拒絶した。彼は大に怒って市を破門して帰った。そしてこの和解を拒絶した主なる人はダンテであった。これがダンテが法皇の忌諱を買った始めであろう。

それから又黑白の党争が激甚になり、コルソ・ドナーティはポポロ政府とピアンキの勢力とを擡ぐため、法皇と結託してフランスからシャル・デュ・ヴァロアを招こうとした。ピアンキ政府はコルソ一家を始めとして黒党一派を追放したのであったが、ブルーニに依ればこの建策は市に於て最も重要視されたダンテその人に出たと云うことになっている。法王はピアンキに対して怒を忘れることが出来ないから、シャルを督促する。シャルは1301年11月1日を以て市に入り、表面は平和改善を謀るとみせて、予めの計画実行にとりかかる。市民は驚いて直ちに戦備をしたが、コルソ・ドナーティはペレトラより一味の兵を掲げて勿々帰来し、サン・ピエロ・マジョレに現われ、バスタリ抑留の囚人を放ち統領を逐うた。囚人、被追放者、暴徒等は四方に蜂起して野獣の如く荒れ狂ったが、シャルは見ても見ぬ振をなし、市を乱民のなすが儘に任せた。そして一先づ暴風が過ぎてから、新たにカンテ・デ・ガブリエルリを迎えてポDESTaとし、白党に陰謀を企てる者があるとの口実の下に白党の者を捕え拷問にかけ或は斬罪の刑にかけ財産を没収した。ダンテも1302年1月27日附を以て追放に扇せられた。主なる罪名は在任中の官物私消、不正利得、收賄、法王及びシャル王の好意に反して市の破門を招いた事等々である。ダンテは敢て罪の弁明を行わないで万斛の憾を呑んで市を去る。そこで家財は没収となり、3月10日には更に苛酷な宣告が下され『共和政府の地域にて捕はれたる時は焚刑に処す』となった。かくて彼は、慕いあこがれるフィレンツェの懐に帰ることは許されず、再び妻子と相見ることもなく一生を異郷の空に流竄の漂零生活を送らねばならなかった。（二男ピエトロとヤコボ、末女ベアトリーチェは後にラヴェンナに来ている）

法王ボンファツィウス八世は非常な野心家で、鉄の如き意志を以て自己の政治権力の拡大に努めたので、ダンテは彼を今様バリサイ人の巨魁と悪罵したのも尤もであるが、不具載天の敵として激しい政治的憎悪を以て彼を取扱っていることは神曲に於て見らるる通りである。しかしヴァチカンの地下窟にあるこの法王の記念碑は、若々しい温和な顔つきを示しており、その他今日残っている肖像も八十余歳まで生きたその人を、やさしい柔和な様相に於て現わし、ダンテによってあれ程真剣に憎まれねばならぬほど傲慢な顔つきをどこにも見せていないのである。この大きな闘争の主たる彼は敵側の激しい憎みによってあまりに黒くぬりたくられている

のではあるまいかとの説をなす人もある。とにかくボニファツィウスは最後は仏王と不和となり悲憤の余り壁に頭を打ちつけて死んでいる。

追放を以てダンテにとっての苦難と辛惨の流浪生活が始まる。当時に於て殆ど乞食と扱ふところなき外部的生活は開始された。彼は伊太利の小諸侯の宮廷や、富裕な慈善家に縋ってその露命を維がなければならなかった。この様な状態に於ては、施与を受けることも拒絶されることも、共に如何に心を傷けるものであるかは誰にも容易く想像の出来ることであるが、沉んや彼の如き氣を負うことの高き人に於ておやである。彼が恩人の間に在っては皮肉な陰鬱な被保護者であり、その友の間に在っては非社交的な嘲笑であった事を、誰も彼に向って咎めることは出来ないのである。彼は「他人のパンの如何に辛きか、他家の階の如何に険しきか」を身を以って体験せねばならなかった。

しかしこの外部的辛酸の中に『真の道』に回帰する内面的転換は徐々として始まった。追放の初年に於て、彼は既にその知識と精神の力を以て、屈せられた名誉を恢復せんとする不屈な決心を固めた。他人の食卓に於て食をとらなければならなかった彼は、世界の浅薄な俗人達を彼の精神の饗宴に招じて、自ら饗宴の主となろうとした。かくて彼はその『饗宴篇』Convivisを書き始めたのである。

勿論彼は当時の学問を、それが当時に於て認められた代表的権威者によって与えられるが儘の内容形式に於てとり入れたのであった。真剣な批評は彼に於て求められるべきではない。彼は凡てを客観的に大なるものとして見ている。当時の学的経営は宗教機関の手にあつて、その最高の華はドミニカン、フランシスカン派の高僧の力によって咲かされたものであった。当時の大学的知識の偉大なる構想と論理的に明確なる構成とはダンテの精神発展に力を与え、それ等の学校知識の形式を彼の作曲に於て取扱い、第二義的な小さなものまで詩的にさえも利用するに至った技巧の確実さは、彼が、当時の知識人を動かしたところの大きな諸問題、神学研究の機構の中へ深く沈潜した事を立証している。勿論ダンテが当時の時代思想を超越して時の学校知識から解放されてあろう事を要求することは出来ない。彼にとっては教会の信仰教義と世界に於けるその神的任務とは厳とした客観的事実であり、地上に於ての最高の所与として立っていたのであるから、大学に於ての小さな学者論争には批判も下したけれども、大体に於ては学習者の態度を持していたのである。彼の著作の中に用いられている論証は、その内容に於ても応用の形式に於ても全く中世の学問に依拠したものであった。『俗語論』は1310年頃の作であつて、彼をば羅曼文献学の先駆者となすものである。『帝政論』は政教分離を説き皇帝の独立性を理由づけたもので共にラテン語で書かれている。『饗宴篇』は未完成ではあるが、大なる哲学大系を作るべきものであった。それを民衆語なる伊太利語で書いたことは、しかも全篇の気焰頗る揚り、文致自ら堂々たることは、彼の信念と熱意の強さを窺わしむるものがある。そしてそれはまた追放中彼が学問に生きこれに慰藉を求めた心の清き貴さを示している。他家に客として、階高く食にたく、自負心の屢々傷つけられたるその有様は紙面に躍如として表われていると云う。

ダンテと共に追放されたピアンキの徒はアレツオに集まって善後の策を講じ、ダンテも又これに加わった事は事実であるが、孤高の気高き彼はちきに彼等から離れ、彼自身適切に表現している如く『一人一党』を作ったのであった。1303年にはヴェロナに行きスカラ家の同情の蔭に身をよせた。その時の主バルトロメオには詩人は大に傾倒していたが、彼の死後家をついだ、新しい家長アルボイには好感を抱いていなかったらしく、ちきそこを去っている。それから彼はトスカニアを去り伊太利を捨て巴里に行き更に英国のオックスフォードまでさすらって行ったとまで想像する人があるが、これはもとより臆測に過ぎない。スカラ家に客たりし時、まだ幼年のカン・グランデの将来に大なる望をかけたことは特に記憶されてよかろう。そのほか彼の流寓の地としては、彼の詩名に最初の月桂冠を与えんとしたボロニア、彼の最後の安住の地となり墓処となったラヴェンナの2つを記憶しておけばよいであろう。

この間に欧羅巴の政治界にダンテを驚喜させることが起った。それはルクセンブルクのハインリッヒが法皇クレメンツ5世の同意を得て神聖羅馬帝国との帝位に上ったことである。彼がハインリッヒ七世として即位したのは1309年の正月であった。彼は教会と帝国と協同して世界に平和と統一とを齎そうとする理想家的の夢を抱いて1310年9月に伊太利に入った。彼はこの年の末に巴里から伊太利に帰り、皇帝に祝辞を奉り、全伊太利国民に彼の統治に悦服すべきことを勧告する公開状を發した。彼は焦躁とも云うべき気分で全伊太利を、特にフィレンツェを、克服する日を待った。併し時勢は彼の夢に幸しなかった。フランスの勢力を代表するナポリ王ロベルトがそれに対抗する。正に勃興自立の機運にある伊太利の諸市が独逸皇帝の統治を甘んじて受けようとしなない。この二つの勢力が合流する。そしてフィレンツェがゲルフ諸市同盟の先頭に立つ。ダンテはフィレンツェを非難する激烈なる書策を發する。しかし彼の高遠な理想は遂に現実によって砕かれなければならなかった。皇帝は障礙の多い遅々たる進軍の後、1313年8月24日病のためにシエーナの近くに陣歿した。ダンテの政治的夢想は遂に画餅に帰する。彼は新たにフィレンツェ市の呪を負うて終生の流浪を続けるべき運命に陥ったのであった。

彼が集中して神曲の制作に没頭したのは恐らくこの絶望後のことであろう。彼は最早や生前フィレンツェに帰ろうとする焦り心をすてた。1316年にフィレンツェ政府は被追放者が重い罰金を払う条件でその帰国を許した。多くの被追放者は喜んでその条件に従ったが、ダンテはこれを拒絶している。彼はある友に向けて次の如く書いている。『それは故郷へ帰るべき道ではありません。若し貴下により或はまた他の人によって、ダンテの名分と榮譽とを傷くところなき路が見出されるものならば、私は躊躇することなくその道を行きましょう。しかしかかる路によってフィレンツェに導き帰されるのでないならば、私は再びフィレンツェの地を踏みませぬ。然らばこの先きは如何なるでしょうか。人生は至る処に日と星と光を見得るではありませんか。今私がフィレンツェ国民と政府の前に出て行けば、名をけがし破廉恥漢となるではありませんか。このままに居れば蒼天の下至る処で私は愉快極りなき真理の思策に耽り得るではありませんか。また私としてパンに事欠くことはないであります。』

ダンテ神曲解説序説

併し一面にはなお彼の心の中に自己を守る操持と共に、その故郷を懐う心の竊かなる滄望は消えてはいなかったのである。その苦哀を歌っている神曲の一節がある。そこに彼は、彼の大作が国民の憎みの念を打ち負かして、それがフィレンツェにて詩人の月桂冠をば彼の為に得させてくれるようにという、はかなき望みを述べている。

永の年月身を心を苦しめて、
作りなしたる神聖な地と天とに亘るその歌が、
故郷の厩に、そこにはかつて小羊が眠りたりし処に、
わが帰り行くを妨げたりし辛きさだめを、
和らげ得るならば—それが誉れをかつし与え得るならば、
かつて彼が信仰を契いにしその洗礼盤の傍に、
そしてペトルスが彼を兄弟とよびたるその処にて、
変り果てし老人を月桂冠が飾りくれるならば—

(ポーホハンマー自由訳による)

というはかない願いを抑えることが出来なかった。これは神曲第25歌の歌い始めであるから、かなり後の事と思われるが、私はこの気を負える人の姿を歪める事のないように注意しつつ、この事をも述べて置かなければならない。

しかしその日は遂に来なかった。最後までフィレンツェ人の宣告は変らなかつた。剩さえ苛酷な追放令は強化されてダンテの二子ピエトロ及びヤコボの上にまで及ぼされた。フィレンツェの政情変化はこの様にめまぐるしいものであった。二子も故郷を捨てて父のあとを追わねばならなかつた。

1317年以後ダンテはラヴェンナに定住の地を求め得た。彼を招待した者はポレンタ家の主グイド・ポレンタであった。彼はフランチェスカ・ダ・リミニの甥である。新なる追放状によって追われたる二男児は今彼の傍にあった。末娘のベアトリーチェも来り集った。かくてダンテは『寛仁なる主の保護の下に数年をラヴェンナに過し、多くの学者を集めて詩を教え、殊に国語で詩を作るわざを教えた。』（ボッカチオ）。ダンテは久しく中絶していた神曲の完成を急いだ。地獄篇と浄罪篇とは既に成り、彼が詩人としての名は四方に喧伝され、彼を慕い彼を敬う人達が彼の許に集まった。招待者ポレンタ家の主もその一人であった。ボロニア大学に輝く巨星ジョヴァンニ・デル・ヴィルジリオとも詩交が結ばれ、彼を通じてその詩からは彼に月桂冠を与えんとの申出さえあった。カン・グランデとの交誼は依然として良好であったので、彼はヴェローナに往来することも出来た。嵐の中を吹き廻された被追放者にも憩いの家が与えられたのである。その状態の中で彼は神曲の稿を完成した。この頃ボロニアのヴィルジリオとの間に往復された牧歌体の問答詩はこの頃のダンテの心持を知るには大切な記録である。ダンテの心には落付いた余裕が宿っていたことが明かに認められる。

1320年の夏ラヴェンナとヴェネチアとの間に小葛藤が生じて風雲急なるまでに至ったが、ラ

ヴェネチアはあくまで平和解決を欲し、翌年使節を送ることとなしダンテをその一人に加えた。（ヴェネチアはダンテの雄弁を恐れて会見を避けたとヴィルラーニは云っている。）帰国のために陸路をとらねばならぬ事になったが、（之もヴェネチア政府の故意にしたうとだとの説もある）。その途中は有名なアラリアの流行地であったので、その途に得た病の為に1321年9月14日（56歳4ヶ月）遂にこの詩人の貴い命は死の手に奪われる結果となった。ポレンタ家の主グイドーは、その亡き骸を棺に納め詩人としての飾を施し、柩はラヴェンナの名士の肩に担がれ、この偉人にふさわしい敬意をこめて、市のフラーティ・ミノリ僧院に運ばれ、ここで彼の遺骸は殆んど全市を挙る哀悼の声の中に石棺に納められた。それは今でも残っている。グイドーは、余の生命と運命の続く限り、一大廟を建立して彼を崇めたいと願い、それはまた衆庶の賛同を博したのであったが、不幸にして内乱のためその翌年彼もラヴェンナを去り1325年にはボロニアに客死したので、彼のその願は全うされなかったが、1483年に至りベルナルド・ベンボーがヴェネチアからポDESTAとして来てラヴェンナに滞在中、元のダンテの墓を修め、大理石で廟を建てた。それは当時の名匠ピエトロ・ロムバルディの手になるものであったが、それはまた1780年カミリオ・モリジアによって立派に改修された。

ボッカチオは敬慕の余り、罪なくして此人を追放した『極悪非道の母フィレンツェ』を罵りその反省を促した。その熱誠は決して空には終らなかつた。1396年即ちダンテ歿後74年、フィレンツェは最早や非道なる母ではなかつた。この偉人の像を立て、出来るならば遺骸をも合せて安置しようとした。しかしこれはラヴェンナ側の拒絶により成功せず、遺骸は尚おラヴェンナの温い保護の下にそこに安らかな眠りを続けているのである。

フィレンツェにあるダンテの生家なるものは、十九世紀の中頃に定められたもので今は公開しているが、あまり確実なるものではないらしい。1865年詩人生誕600年記念祭に当り、エンリッ・パヰイの手による立派な大理石の記念像がサンタ・タクローチェ広場に立てられ除幕された。

ダンテの生存中、当時の民衆にとっては、今吾々が神曲を通じて見るような偉大な英傑ではなかつた。彼が1300年以前に書いた抒情詩は清新体とは云っても、なお形式内容共に当時の抒情詩のそれに従つたもので、彼を有名にはなしたが、未だそれを以て濟輩の高さを抜くには足りなかつた。政治上の党派戦に於ては、ダンテは彼の時代の世界観に根ざしたる都市中心の政治家の規準を越えてはなかつた。彼を真に不朽ならしめたものは、まさにこの神曲である。神曲こそは永い苦難の歳月の間に浄化されたる彼の詩人的予言者的な力の成熟せる果実である。一身の救済と人類の批判を現わし、人間に対して救に至るべき道を示そうとしたところの此詩神曲こそは彼を不朽にした。しかし同時代の人々達も既にその価値に就ては少くとも予感的に臍ろには知っていた。ヴィルラーニは云っている。『彼はコメディアを書いた、その中に彼は精細に彫琢せる韻律を以て、そして道徳学・自然科学・星学・哲学・神学からの大きな痛切な問題を以て、新しい美しい比喩と詩形の下に、百の歌に於て地獄と煉獄と天国との状態

を描いた、人が云い能わざるほど荘厳に……………』。

ボッカチオはダンテが死んだ時は八歳であったから、彼を個人的に見たことはなかったであろう、また彼のあまりに多弁なる伝記は凡ては信を置くには足りないかも知れないけれども、彼の外貌や他の種々な事件の外部事情の記述に就てはラヴェンナが彼に確かな解決を与えたであろう。それ故彼の云う所に信を置いて下の一節を適出する。

『われ等の詩人は身の丈は普通で、年老いてからは少し前かがみに静かに歩いていた。その歩調は真面目に正確で、着物は年令に相応な地味なものを選んでいて。面長で鷲鼻、眼と顎とは大きく、少し突出した下唇をもっていた。皮膚の色は褐色で髪も鬚も密に黒く縮れ、外観的には常に沈鬱で深い考えに沈んでいる様に見えた。家に居ても外に出ても甚だ落着いていて態度は端正であり、また非常に丁重で容儀は正しかった……………彼は孤独を愛し、他人から煩わされぬよう常に離れてあることを望んだ。他人と共にいた時、ある思想が起ると、彼はそれを完全に考え尽すか払いのけてしまうまでは、何事に対しても答を与えなかった。その事は食卓に於ても散歩の間に於ても屢々見られたことであった。精神的作業に於ては、それに捧げられた時の間は、耳に達した如何なる新しい事も、彼をそれから引き離すことが出来ぬ程、それに彼は熱申した。』

彼の肖像を見ると、世から離れた内向的な夢想家の様に見えるが、彼の丁寧な円転滑脱な行蔵は、ここに見られる外貌とは寧ろ一致しなかったと云われている。彼の外貌は厭世家のタイプを示している様であるが、その鋭い下に向った皺とかたく結んだ両唇とは強い勝ち誇った意志によって、あらゆる情熱の襲来を抑えんとする努力を示していて、反抗力なき悲しさの様子は示していない。上品な鷲鼻は熱狂者妄想家を現しているかも知れないが、垂直な皺をもっている高い額は、鋭い思慮と情熱を抑えた黙想を証拠だてている。

ジョットーの壁画による彼の肖像に就ては前に述べた。学者の考証によれば、この画は彼が25歳より35歳の間のものであると云う。その他には『ナポリ胸像』及び『ダンテ死面』が最も貴重なるものとして伝えられている。カーライルはダンテの肖像に対して云っている。

『私にとってそれは最も傷ましい顔である。恐らく私の知っている顔貌の中で最も悲痛なものであるであろう一、虚空の中に描かれているかの如く寂しく、簡単な月桂冠によって飾られ、不死の痛苦と同じく不死なる勝利の確信—それがダンテ—生の歴史を示している—。実物より写されたるものの中でこれ程悲痛なるものはあるまい。真に、あくまで悲劇的な、心傷を痛ましむる顔貌である。その中には奥底に小児の如き柔和可憐温雅なる愛情をたたえながら、云わば鋭い反抗に、諦めに、孤独に、傲り高き絶望的な悲痛に凝固されて居る如き孤高さが見えている。……………それはまた言葉なき悩み、黙せる冷嘲そのものである。唇は歪み曲げられて、彼の心をさいなむものをば、神の力をもって侮れるが様である。それが恰かもつまらぬ言うに足らざるものであるかの如く、それを殺し得る自分が遙かにより偉大であるかの様に。世界に対してあくまで反抗し終生不屈の戦をなす人の顔貌である。すべての愛は憤りに変わり、和しがたき怒は、

ダンテ神曲解説序説

ゆるやかに、なだらかに、云わば神の怒の如き、もの云わぬ怒にかわり行く。目はまた、世は何故にかくもあるかと審るが如き驚きの一種に輝いている。これこそダンテである。彼こそは沈黙の千年の声である。かくして彼は吾等に対し神秘にしてはかり知るべからざる歌を歌い出したのである。』

(本学前教授一音楽史 文学概論)